

〔書評〕

## 中村史著『日本靈異記と唱導』

山口敦史

本書『日本靈異記と唱導』（以下、本書という）の著者は、近年矢継ぎ早に『日本靈異記』関係の論文を物し、注目されていたが、今回は、そのはじめての論文集ということになる。

『日本靈異記』を研究することの文学史的な意味は何処にあるのか。ここでは古代（前期）文学研究における意義という点から考えてみたい。三浦祐之氏によると、『日本靈異記』は「最近の古代文学研究のなかでは主流の位置を脅かすほどに取り上げられることの多くなった作品」であるという。その理由について三浦氏は、「古代文学研究の全体的な成熟」があるからだという（「序」『古代文学講座11 靈異記 氏文縁起』勉誠社、一九九五年）。

前述の文章で引き合いに出されている「主流」とは、言うまでもなく、いわゆる記紀万葉を中心とする従来の（上代文学）としての研究分野である。それを中心にすると、『日本靈異記』などは、取るに足らない「傍流」の文学作品ということになるが、三浦氏の発言は、この暗黙のうちに流通している（上代文学）観が揺らいでいることを表してもいよう。

『日本靈異記』への興味の持ち方には、さまざまなものがあるが、近年提唱されつつある、文学生成の（現場）への着眼といった研究動向と関連してくるものがある。『日本靈異記』にはさまざまな階層の人物が活写されているが、その中で宮廷外の一般人や、その一般人を教化しようとする宗教実践者の活躍が多く描写されている。その行動や思念の明快さ・生々しさから、これまでの（記紀万葉）の研究からは見えてこなかった視点を獲得することへの期待があるのだろう。それは、文学を宗教的な実践の一顕現とし、その顕現をより具体的に捕らえたいという願望でもある。

中村氏の研究方法は、本書の序において明解に述べられている。氏は『日本靈異記』の唱導性の究明を中心に据え、

## ①『日本靈異記』説話の研究

## ②説話集『日本靈異記』の研究

の二つを峻別して考える。それによると、①は、「説話集のなかに、編者の編纂意図とは無関係な、説話集という組織の持つ秩

序から解き放たれた、伝承され生きて動くものとしての、個々の説話を見出し、これを研究する」ものだという。これに対して②は、「編者の編纂意図を体現した、説話集という秩序を持った組織体、編纂され、動かなくなったものとしての、説話集総体を研究する」のだという。

さらに各説話は「標題」（話の題目）・「素体」（話そのもの）・「説示」（話の説明）に区分される。その関係は、説話の素材としての「素体」が仏教唱導の際に、「評論的、教訓的言辞」としての「説示」を付与され、さらに説話集に組み込まれる際に、主題を明示するために「標題」が冠されるというものである。したがって、研究にあたっては、これらの要素を弁別することが必要で、本書ではまず、各説話の「標題」と「説示」を取り除いた結果、立ち現れてくるのが、『靈異記』編纂の素材として用いられた原説話（＝素体）だと説く。その「原説話」の「法会唱導の場における經典の例証話としての機能を見る」のだという。これは具体的に悔過や布薩などの仏教儀礼を指し、その儀礼の場が依拠する經典の経説に対応して「原説話」が形成され、「經典の説くところの正しさを実証する例話」（＝例証話）として機能していたと述べている。以上が①の主要な論点である。

また本書は、②の観点から『日本靈異記』の編纂論に射程を広げて論じている。『日本靈異記』の編纂者は「原説話を収集」して「標題と新たな説示を付加する」ことによって、「原説話」の「再解釈」「普遍化」を行ったという。そのような「処理」によ

って、編纂者は「原説話」を、「現報善悪」「靈異」を説く『靈異記』説話へ変貌させたというのである。

本書は以上のような観点に基づき、『靈異記』説話の具体例を挙げて論述を行っている。そこでは説話は「標題」・「素体」・「説示」に解体され、主に「素体」・「説示」について、法会の際に使用される經典類に、語句や内容上の多くの類似点があることが指摘されている。そして、本書は法会と説話の対応関係を論じており、法会という場における唱導の諸相を明らかにしている。

ここで指摘されている經典類は、『日本靈異記』と仏教思想との関係、または海彼の典籍との比較関係を論ずる際に、これから決して看過することのできない意義を有していると考ええる。当然のことを言うようだが、今後の『日本靈異記』の研究には、このような仏典ならびに漢籍との比較——影響関係を見る——という視点は、必須のものとなるだろう。

そして、この点に関して本書において特筆すべきことは、従来の古典作品の比較研究ではまず第一に論じられていた、〈出典〉という語を主要なものとしていないことである。〈出典〉という語は、机上での典籍間の引き写しなのか、伝聞・口承関係なのか、などを推察する余地を生じさせてしまう。これに対して本書では、法会——宗教儀礼の場——における衆生教化のための例証という、きわめて動かつ具体的な状況の中に説話と經典の関係を想定している。

その成果のひとつの例は、經典の注釈書類（經疏）と儀礼の關係を取り上げたことである。例えば、『日本靈異記』上巻第十七縁について、最後の（本書で言うところの）〈説示a〉に「丁蘭の木母すら猶し生ける姿を現じ、僧の感ずる画女すら尚し哀形に応へき……」以下続く語句がある。この句については『劉向孝子伝』『諸經要集』『法苑珠林』が「典拠、もしくは参考資料として挙げられてきた」（本書六十九頁）のだが、中村氏はこの箇所を「原典」として『十一面經義疏』（『十一面神呪心經義疏』とも。大正蔵第39、慧沼述を挙げる。これは神呪の功德を説く『十一面經』（『十一面神呪心經』とも。大正蔵第20）の記述への解釈としてあり、それは「木は是れ心無し。何の故にか動きて声を出すや」という「問い」に対する「答え」として、提示されているものである。そして、これを単に「典拠」と言ってしまうのではなく、この表現が法会で使用された可能性を示唆している。さらにこの上巻第十七縁の話は、「十一面經義疏」にもとづく説法用類型表現が付された、十一面悔過の場における、『十一面經』の例証話であったものか」と記している。この立論は、義疏（經疏）が經典の注釈だという性格を把握していないとできないものである。このような論述によって、『日本靈異記』における説話と經典の關係の一端が明らかにできるのである。

以下、枚数の都合で詳述は避けるが、第二編の全部と第三編の第一章は、〈法会の場合における例証話としての説話〉という論旨が中心的に作用している。その成果の重要さは大いに評価される。懺悔が景戒の意識の根底にあるのは言えるとしても、景戒がそのような内的な感情に向かう動機としての神秘体験も考えに入れるべきではないか。中村氏も指摘しているように、『法苑珠林』巻第二十三の懺悔篇では、『涅槃經』からの引用として「懺者羞人。愧者羞天」（大正蔵第53、四五四a）とある。ここでの「人」や「天」に対する日常的な概念からの転換——「人」「天」への「羞」の自覚——が、この時代の宗教者にとつての宗教体験なのだと言えないだろうか。この「人」「天」は中国の伝統的な思想の要素も混入するだろうことは想像に難くない。そのことまで踏まえて、『日本靈異記』の中の懺愧・懺悔の問題は考えることができよう。困難な問題だとは思ふが、法会・例証・懺愧などの概念について、より踏み込んだ研究を期待するものである。

以上、卑見を述べてきたが、本書が『靈異記』研究に画期的な意義を有するものであることは、疑う余地がない。中村氏の今後のさらなる研鑽を祈念し、その成果に刮目していきたい。

（三弥井書店、平成七年五月、二六三頁、二八〇〇円）

（やまくち・あつし 九州大谷短期大学専任講師）

べきものと考えるが、ここでさらなる要望を申し上げると、説話の生成の場の探求をさらに、具体的に進めてほしいと思った。中村氏は、歴史資料で奈良時代に悔過が盛んに行われていたことを論じている。しかし、現段階の歴史資料では、その悔過がどのような儀式次第で挙行されたのか、そしてその中で經典の誦誦と組み合わされて、どのように〈説話〉が披瀝されたのか、などがいまひとつ明解にならない。それを解明するひとつの手立ては、義疏（經疏）の受容のありかたを考慮することではないか。

例えば前述した『十一面經義疏』は、中村氏の挙げている箇所を読むと、観音像が動揺し声を発するという、常識ではありえないことを信じさせるための記述としてある。ただの木像が動いて発声するのは「一者行人心誠。二願強盛故。三菩薩願重故也」（同右、一〇一〇a）の三点によってありうるのだ、としている。ここでの常軌を逸した「願」を受け止めて「丁蘭の木母すら……」の〈説示〉があり、〈素体〉もあるのだろうか。法会という場において、かかる「願」から説話的表現がどのように表出されたのか、可能な限りの探求をしてほしいという願望がこちらにはある。その「願」は、景戒が抱いた「懺愧」や「懺悔」の念と決して無関係ではないだろう。第三編の第二章では、その「慧沼が『十一面經義疏』を著した動機」を「懺愧や懺悔により悪業（＝悪行）を滅することを教えている」（二四四頁）のではないかとしている。

その第三編の第二章は、これまでの論とやや趣を変えて、景戒の夢告と夢解きを観音悔過体験で説こうとするものである。懺愧